



何をやっつけばいいですか (その2)

(続き)

何年か前に浪速大学医学部からKCに移ってきたN田先生が浪速大学に「絶望」した理由としてこんな話をしてくれたことがある。授業が終わったとき学生が先生のところに息せき切って近寄って「先生、質問があります」と言ってきた。

N田先生は「何だい？」とあふれるような教化的善意をもって振り返った。

「先生、さっきの、国試に出ますか？」

学生からの質問の過半が「国試に出ますか？」で占められるようになったときにN田先生は医学部教育への情熱を失ってしまったそうである。

「国試に出ますか？」は「なにやっつけばいいですか？」と同一の問いである。学ぶべきミニマムを訊いているのである。国試に出ないことを勉強するのは(医師になったあとにその臨床例に遭遇したときのことさえ考えなければ)まったくの無駄だからである。

ここに働いているのは「計算」ではない。「抑圧」である。

学生たちは「最小の学習努力で必要最低限の成果を挙げる」ためにはどうすべきかという計算だけを求められている。どのような頭の使い方や身体の使用方をすれば自分の潜在的な心身の能力は爆発的に開花し、そのパフォーマンスは最高になり、アウトカムは最大化するか、というような問いのために、この計算能力は決して利用されることがない。

ある種類の計算のためにしか知性の行使が許されないという場合、それは「計算をしている」のではなく、「計算することを強いら

れている」のである。

だから、私はそれを「抑圧」と呼んだのである。

最低の学習努力で、必要な教育商品を手に入れること、今の日本の学生たちはそのような「消費者的ふるまい」を強制されている。そして、学生たちが代価として差し出すことを求められている「最低の学習努力」は、同学齢集団の学力が下がれば下がるほど少なくなる。

平たく言えば、「他の学生たちがバカになればなるほど、少ない学習努力で単位がもらえ、卒業証書が手に入る」のである(大学だって、一学年の半分を留年させるわけにはゆかないから、最初は泣く泣く「下駄を履かせ」、そのうち天を仰いで「小学生でも解けそうな問題」を定期試験に出すようになる)。

だから、消費者マインドを保持している学生にとっては、自分を含めた学生たちの集団的な学力が劣化することは「ますます安い代価で商品が手に入る」歓迎すべき状況を意味しているのである。

それが今の日本で起きていることである。

(後略)

(『街場の憂国論』晶文社、2013)

*

きわめてまっとうな指摘である。そして、こういう学生集団にならないことを、日比谷の先生方は求めているのだと思う。常に高め合い、互いに尊敬しあえるような関係が築けた時、この3年間の日比谷での学校生活は豊かで思い出深いものとなるに違いない。そういう集団になってほしいものである。